

A photograph of a clear blue sky filled with scattered white clouds. In the foreground, several utility poles with power lines are visible on the left side, and a series of tall, thin streetlights are visible along the bottom edge. The overall scene is bright and open.

あの日見た 空の色を
僕たちはまだ描けない

著者 大森拓也

■著作権について

本冊子と表記は、著作権法で保護されている著作物です。

本冊子の著作権は、発行者にあります。

本冊子の使用に関しましては、以下の点にご注意ください。

■使用許諾契約書

本契約は、本冊子を購入した個人・法人(以下、甲と称す)と発行者(以下、乙と称す)との間で合意した契約です。本冊子を甲が受け取り開封することにより、甲はこの契約に同意したことになります。

第1条 本契約の目的：

乙が著作権を有する本冊子に含まれる情報を、本契約に基づき甲が非独占的に使用する権利を承諾するものです。

第2条 禁止事項：

本冊子に含まれる情報は、著作権法によって保護されています。甲は本冊子から得た情報を、乙の書面による事前許可を得ずして出版・講演活動および電子メディアによる配信等により一般公開することを禁じます。

特に当ファイルを第三者に渡すことは厳しく禁じます。甲は、自らの事業、所属する会社および関連組織においてのみ本冊子に含まれる情報を使用できるものとします。

第3条 損害賠償：

甲が本契約の第2条に違反し、乙に損害が生じた場合、甲は乙に対し、違約金が発生する場合がございますのでご注意ください。

第4条 契約の解除：

甲が本契約に違反したと乙が判断した場合には、乙は使用許諾契約書を解除することができるものとします。

第5条 責任の範囲：

本冊子の情報の使用の一切の責任は甲にあり、この情報を使って損害が生じたとしても一切の責任を負いません。

◆ 推奨環境

このレポート上に書かれているURLはクリックできます。

できない場合は最新のAdobe Readerをダウンロードしてください。（無料）

<http://www.adobe.com/jp/products/acrobat/readstep2.html>

第1話 出会った 二人

僕は 滝川高校に通っている

1年の 朝倉 拓哉。

本来 この高校は 県内でも もっとも

レベルが高い高校で

僕が いるのは おかしい 高校だ。

じゃあ なんで 僕がこの高校に いるかって？

それを 話すと とても長くなってしまうけど

まあ どうしてもと 言うなら

聞かせて あげようじゃないか。

そう あれは

僕が中学1年の時に 遡る。

僕は そのとき 陸上をやっていたんだ。

陸上といっても その学校は 小さな学校で

陸上部はない。

陸上の大会が ある夏から秋にかけて

練習があるって だけの クラブみたいな 感じ。

練習をさぼる 幽霊部員なんて

沢山いる。

僕は そんななか 真面目に練習をしていた。

僕も 足は 速い方だったが

僕と同じぐらい 足の速い先輩がいた。

それが 南先輩だった。

先輩は足が 速いだけじゃなくて

とても明るく かわいい先輩だった。

その頃は まだ 話もしたことがなく

特に意識は していなかった。

それから 時間は過ぎていき

季節は 冬になった。

それはもう 卒業式まで

1ヶ月と 控えた ある日のことだった。

たまたま 廊下ですれ違った。

そのときに 色々話をしていると

先輩は どうやら 滝川高校に進学するみたいだった。

先輩は 運動だけではなく 頭もよかった。

そのとき 先輩は

・・・ 拓哉も

滝川高校に来てね　と　言ってくれた。

それが　すごい　嬉しかった。

もしかしたら　そのときかも知れない。

僕が　先輩のことを　好きになったのは

そして　卒業式の日。

僕は　雪が降る中　先輩を見送った。

本当は　声をかけたかったけど

かけれなかった。

言葉が　見つからなかった。

でも 僕は これで さよなら するなんて

いやだった。

だから 先輩に 告白することにした。

もちろん 直接告白するなんて できなかったの

メールですることにした。

僕はそのとき てんぱっていたので

何てメールしたかは わからない。

でも 好きです。 とは 書いたと思う。

すると すぐに 返信がきた。

そのときも てんぱって いたので

内容はほとんど覚えていない。

ただ　なんとなく　受け流されてしまったのだ。

またまたー　みたいな感じ

可もなく不可もなくって　感じで　その日は終わってしまった。

僕の人生の　初めての告白は

受け流されてしまったのだ。

そして　彼女は

学校を卒業していった。

もう　二度と　会えないと　思うと

涙があふれてきた。

それ以来は 会ってもいないし メールも一切していない。

僕は それから

ごくごく普通の 学園生活を送っていた。

時は過ぎ

中学3年の 秋

そろそろ 進路を決めないと いけなかった。

その時 僕は ふと 彼女のことを思い出していた。

滝川高校に来てね

その言葉だけは 覚えていた。

そのとき

僕は思った。

・・・ もう一度会いたいと

・・・ もう一度 声が聞きたいと

その頃は 他の女の子が好きだった。

でも やっぱり

彼女のことを 忘れられなかった。

そして それから 僕の猛勉強の季節がやってきた。

高校受験は 国語 数学 社会 英語 理科 の5つがあるが

合計で 8割以上は とらないと

受からないと 言われ 僕は ショックを受けた。

僕は 英語の成績が特に悪く

3割以上の点数がとったことがないのだ。

未だに 関係代名詞とかもわからないほどだ。

残りあと3ヶ月ぐらいしかない

そこで 僕は かけに出ることにした。

英語を捨てて 他の4教科で 9割以上とればよかった。

そして 僕は猛烈に勉強した。

他の人は塾にいったりする人が多かったが

うちには そんなお金がなかったので

完全に独学で 勉強をしていった。

そして 僕は 最後の 模試で

自己最高得点を 出していた。

学年で 初めて TOP10にも入れた。

もちろん 自己最高得点と言っても 英語以外の話だけど。

そして 入試 当日

いよいよやってきたが いきなり最初が 英語だった。

英語は ほとんど捨てているため

リスニングを聞いたあとは 5分ぐらいで 全ての解答を書いて

寝ていた。

だって 見ても わからないからだ。

日本語の問題ならまだ 粘ったかもしれないが。

英語なので さっぱりだ。

でも 他の4教科は ほぼ 完璧にできたので

自信があった。

そして 合格発表の日

その日は 合格発表を見てから

学校に行って 合格した人には 賞状がもらえるという

スケジュールだったのだが

僕は 寝坊したので 合格発表を見ることなく

学校に行った。

でも 心配はしてなかった。

それぐらい 自信があったからだ。

そして その予感も 見事あたり

僕は 賞状をもらった。

でも 合格番号を見て 喜ぶという 経験ができなかったのは

少し残念だ。

なぜなら 僕が受験するのは その一回が

最初で 最後だったからだ。

こうして 僕は

彼女が いる 滝川高校へ 行くことになったのだ。

こうして 僕は 好きな人と同じ高校へ 入った。

でも すぐに 彼女には 会えなかった。

それには 理由があった。

すでに 彼女には 彼氏がいたのだ。

実を言うと 高校へ入る前から

彼女に 彼氏が いたことは 知っていた。

知っていたのだが

さすがに 一緒にいるところを見ると

ちょっと 悲しくなった。

でも　それも覚悟の上で

僕は　この高校にきたのだ。

それから　何度も　声をかけようと思ったが

かけることが　できなかった。

というより　もう　2年以上も会っていないし

連絡もとっていないので

僕のことなんて　覚えていないだろうと思っていた。

そんなかなで　ただ　時間だけが　過ぎていった。

気づいたら 季節は 秋となっていた。

そういえば 今さらながら

メールをしようと 思った。

2年ぶりの メールで

すごい ときどきした。

送信ボタンも押すまでに 8時間もかかったが

何とか メールは できた。

翌日 メールが返ってきた。

なんと 彼女は 僕のことを覚えていて くれてたのだ

それだけで 僕はとても 嬉しかった。

学校で 彼女には 未だに 会えないけど

それから メールする日々が 続いた。

でも そんな ある日 事件が起こった。

間違っていたら ごめんなさい

もし私のことが好きだったら 彼氏がいるので

気持ちには 応えられない と

メールが来た。

僕は すごいショックを うけて

それ以来

彼女にメールするのを やめた。

確かに僕は 彼女のことが好きだった。

でも 不思議と

付き合いたいとかは 思っていなかった

ただ メールしてるだけで

僕は 幸せだったからだ。

それだけでよかった

それ以上は 望んでいなかった。

でも それ以来は

メールをすることもなくなった。

それから 季節は 冬となった。

未だに 僕は ひきづっていた。

あたって くだける とは よく言うけど

当たる前から くだけてしまったのだ。

それからは 一切連絡をとらず

ただ 時間だけが 過ぎて行って

そして また

卒業の季節が やってきた。

彼女の卒業式を見るのは これで 2回目だ。

自分の卒業式なんて これっぽっちも 覚えていないが

彼女の卒業式だけは 覚えている。

卒業式の日には 廊下で 彼女と すれ違ったが

また 声を かけられなかった。

せつかく 同じ高校に来たのに

彼女と 学校で しゃべることは 一度もなかった。

思い出が あるとしたら

一度だけ 電話をしたことだ。

何を話したかは わからない けど

夜中まで ずっと話をしていた。

それが唯一の 思い出だ。

彼女は 頭も よかったので

普通に大学に行くと思っていたが

就職をした。

それは それでよかったのかも知れない。

彼女がもし 大学に行っていたら

．．．

きっと 僕も同じところに行っていたかも知れない

これで もう 会うこともないだろう

と 思っていた。

こうして 僕の片思いは これで

終わる

はずだった。

でも しばらく した あとに

彼女から メールがきた

今度 会えないかな と

僕は とても驚いた

なんで と思っていたが

とりあえず 会うことにした。

これは あとから 知ったのだが

彼氏と別れていたのだ。

そのことが ショックだったのだろう。

僕はそんなことも知らずに

普通に話をしていた。

だって やっと会えたのだ。

約4年 ぶりに ちゃんと 会えた。

その日は 夜中まで

色々と話し合った。

でも その日が 最後の日になるとは 思わなかった。

それくらい 彼女と連絡がとれなくなったのだ。

僕には その意味がわからなかった

なんで 急にとれなくなったのか

今に思えば 彼女が 何を思ってぼくと会ってくれたのか

わからないが

きっと 寂しかったのかも 知れない

それが

高校2年生の 夏のできごと だった。

それからの高校生活は

他の人を 好きになることは なかった。

多分 ずっと 好きだったのだろう。

今 思えば 中学1年生の時から 高校3年生まで

彼女のことを 好きだったのだ。

その6年間で 彼女と ちゃんと会ってしゃべったのは

ほんのわずかで 回数にしたら

10回も ないだろう。

それでも 僕にとってみれば

それは

とても大切な思い出の一部だ。

ほんのわずかな思い出しかないけど

一緒に見た あの空の色を

僕は永久に忘れることは ないだろう。

終わりに

最後まで 見ていただき

ありがとう ございました ^ - ^

P S

フェイスブックもしてるので

よかったら 友達申請してください

私のブログ こちらの無料レポートカテゴリーから
他のレポートも 見れます。

<http://fantasy008.seesaa.net/?1364447728>

私のメルマガ

SECRETBASE モリモリ通信

<http://emfrm.com/BTX/fr/2244/2244>

私のFACEBOOK

<https://www.facebook.com/profile.php?id=100004451826272>

アニメレビューブログ

<http://ameblo.jp/finalfantasy008/>